死に神のコイビト！

架引

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死に神のコイビト！

【Ｎコード】
Ｎ５００８ＢＡ

【作者名】
架引

【あらすじ】
注意事項：不定期連載中。作者事情によって次話投稿に間が空くこともあります。

一見して何処にでもいる学生、静間倫人は実は中三の春に始業式直前に異世界へと召喚された過去を持つ元英雄。
頼まれた邪神討伐を果たして元の世界へ帰ってきてから一年後に、高校の入学式当日に討伐……もとい浄化した神様が押しかけてきたからさぁ大変！

しかも訪問の理由が「私と番になって」と来た！　しかも事後承諾！？

突然の出来事に怒りをぶつけながらも、しかしもう引き返せないと知ると仕方ないと割り切り、高校生活を謳歌することにしたのだが、入った部活「新聞部」がこれまたいかにも胡散臭い活動内容で……。

魔法の存在が常識の並行世界が舞台にした、ホラーの要素を織り交ぜた学園恋愛アクションストーリー、ここに誕生しました。

堕ちた神と戦った少年（前書き）

誤字の発見による訂正をしました。

堕ちた神と戦った少年

始業式の朝。
俺はいつも通りに目を覚ました。はずだった。
でも、頭はなんだかすっきりとしなかった。
原因は多分だけど、夢を見たからだ。
かなり前に体験した、不思議で、貴重で、楽しくて、哀しくて、何処か腹立たしい、過去の夢。

異世界。
そんなもの、あるものか。
こんなものがあったらどうだろう、そういった想像から出来た架空の存在でしかないだろう。
――3年前までは、そう思っていた。
神。邪神。悪神。
そんな存在、勝手の良いときにだけ無意識に縋る、存在しているけど存在しないもの。
そういった、人間の心が作り出した、矛盾した存在だ。
――2年前までは、そう思っていた。
八百万の神。キリスト教のイエス・キリスト。ギリシャ神話のゼウス。彼等の共通点は神であること。
神は絶対の不可侵である存在だ。そして、人知を越えた、説明のつかない存在でもある。故に存在していても、人からの干渉で簡単にその存在は変わるものではない。
――一年前までは、そう思っていた。
でも、そんなものは、間違っていた。
その世界に生きてみて、心で理解したのではなく、体で。そう。身を以って、五感を以って感じることになった。

――3年前。
丁度、始業式兼入学式が終わり、ロングホームルームが終わり。
そして、家に帰っているところだった。
その日、俺は予定通りに、中三の初日を終えるはずだった。
その日。俺は予定通りに、午前中、日も上りきっていない内に家に戻り、午後はＴＶゲームをやろうとしていた。
だが、現実は小説より奇妙なもので。
家に帰る途中。俺は、唐突に異世界へと足を運び入れた。
問題なく、歩いていたはずだった。
目の前は何の変哲もない道路が続いていた。歩こうと思えば何処へでも通じていて。日本国内、本州で有る限り、果てのない道路。
その無数の道路のうちの一本を歩いていたはずである。
なのに。どう間違ったのか。
俺は、気がついたら全く知らないところに迷い込んでいた。
何処までも続いているはずのアスファルトはなくなり、代わりに目に入ってきたのは石造りの床。
都会からすれば遥かにのどかなはずの地方の町並みは消え去り、代わりに目に入ってきたのは狭苦しさを漂わす開放感のない石造りの壁。
何処までも澄み渡った空はやはり消え去り、代わりに目に入ってきたのもやはり石造りの天井。
すべてが石だった。
そして、俺は断ることの出来ない依頼を、頼まれた。
見たこともなく獰猛な肉食獣がいた。
見るからに人相の悪い盗賊団がいた。
そいつらに殺されかけたことは幾度となくあった。
逆にそいつらを殺したことも同じくらいあった。
そして、一週間くらい経って、初めて俺は、異世界というものの存在を、認めた。
――二年前。

それは、受けた依頼をこなすべく異世界で武者修業をしていたときの事だった。
それは、受けた依頼をこなすべく異世界に伝わる聖剣を探していたときの事だった。
いつでもトラブルというのは突然で。
その日、俺は昔から使っている練兵場に発生するという百鬼夜行をなくしてくれという依頼を遂行しているところだった。
百鬼夜行は夜起こるものだ。俺はそんな先入観が働いていた。
そしてそれは当たった。
現れたのは無数の霊達。
みんな、自らの死を受け止められずにこの世に留まった霊達。
けれど。
現れたのはそれだけではなかった。
沢山の霊の中に、いた。
俺が果たすべき役目。その役目の対象が、そこにいた。
彼女は狂気に顔を歪めていて。悍ましい、赤いオーラを発していた。
――そして、俺と彼女は、初めての出会いを果たし、救いたいと思った。
――その後、一年経った、今から一年前。
俺は、邪神との一騎打ちになった。
防戦一方になる中で、俺は彼女に、思いの丈を、叫んだ。
『おい！　お前、目を覚ませよ！　一年前お前が起こしていた百鬼夜行。あの時見えた幻。あれがお前の本心なんだろうが！』
二年前に遭った百鬼夜行。
それを食い止める最中で見た幻があった。
それは、一人の少女が、ふとした好奇心から封印されていた、人の悪意で固められた魔剣を解封してしまい。
優しかった少女の心を一瞬にして黒く染められてしまった、非常に悲しい幻想だった。

《お願い……！　私を、殺して……正気に戻して！　これ以上、無駄に殺したくない！》
それは、神様なんて、邪神何ていう存在とは程遠い、何の変哲もない少女の叫びだった。
そして、俺は察した。本当に邪なのはこの神なのではない。こんな純情な少女をここまで黒く染めてしまうほどの、人が持つどす黒い悪意の塊。それこそが本当に滅ぼすべきものだと、悟った。
――そして、同時に。時に神をも歪めてしまうほどの悪意を持つ、人の心。誰もが持ち得るそれの恐ろしさを、垣間見た。
『目を覚ませ？　ふん！　何よ。私はいつだって正気よ？』
彼女は俺の叫びに対して、そう返してきた。けど、それは黒く塗りつぶされた表層の意識だけだ。深い部分にある、本来の彼女。百鬼夜行が見せたその部分はそうは言っていなかった。そのことを俺は知っている！
だから俺は言い返せる！
『んなことあるかよ！　心のそこで、ずっと思ってんじゃないのか！？　死ぬ必要のない人に死を与えまくって！　未練があって留まっている死霊達を無理やり使役して、百鬼夜行まで引き起こして！　お前はそれでいいのかよ！』
『訳のわからないことを言わないで。だいたい、いっつも人間は勝手じゃない！　欲に溺れて人を殺したり！　他の生き物を卑下して勝手にペットとした挙句、自分達の都合で捨てたり安楽死させたり！　もうそんなことをする生物を見るのなんてうんざり！　そんな自分勝手な生物、私が終焉を与えてやるわ！』
『確かに、そう言う人だっているかもしれない！　でも、それは早計だぞ！　人にはいろんな面がある。　中には、どんな生物にだって等しく接する人だっているはずだ！』
俺のその言葉を聞いた彼女は、眼を細めて、心底不機嫌そうな顔をして。鼻で笑った後で、
『それこそ早計じゃない。いいえ、そもそも何の根拠も無い、理想

論にも見たない、ただの妄想だわ。そう言う人の心の底にだって、今私が言ったような行動理念があるに決まってる！』
『ああ！　確かに根拠なんてないさ！　人の心なんて詠むことは出来ない。表層では優しくとも、内面は極悪。そんな人だっているだろうさ。でも、それでも中には本当に優しい心の持ち主だっているはずだろう！』
『甘いわね』
『なんだと！？』
『本当に甘いわ！　そんな人がいたとして。じゃあ、そうゆう人が、どれくらいいると思う？　それに、人が人であり続ける限り、必ず黒い部分は何処にだってある。ふとしたきっかけで、やっぱり自分勝手な心に染まってしまうものなのよ！』
それを聞いて、俺は、心の底から、キレた。
何処までも、人を否定する目の前の少女に。
そこまで純情な少女を落とした、人の悪意の塊に。
そして何より、偉いことを言っている俺自身も過去に、そうしたことがあったことに。
でも、それを誰にぶつけるべきなのかは、判断がつかなかった。
――目の前の少女？　違う。
確かに目の前の少女自体は、醜悪な存在だ。容姿だけなら、絶世の美少女だけど。
――自分自身に？　正確には正解でも間違いでもあると思った。
だって、目の前の少女が言っていたように、誰にも黒い心はある。でも、俺一人が死んだところで人全員の悪意がなくなるわけでも無い。それに、自分に怒りをぶつけたところで、いいように自己完結してしまうのがオチだ。この問題は、一人で抱えるものではない。
――存在し得る限り全ての世界にいる、全ての人間に対して？
妥当な線だろうけど、そんなの不可能だ。
人は、誰しも黒い部分をもっているのに、それと向き合おうとはしない。いつだって、眼を逸らしてしまう。

そんな理不尽な、で終わってしまい、満足に憂さを晴らせない。
だから、そんなやり場のない怒りを、目の前の少女にぶつけた。
『ああそうかよ！　だったらお前の深層意識の願いどおり、殺してやるよ！　今のお前に存在価値なんて認めて堪るか！　一度消えてゼロからやり直しやがれ！』
怒りに任せたその一撃は、思いのほか早く、強く繰り出せた。
そして、目の前の、邪神と化した心優しい少女は、聖剣の効果で、浄化された。

神は死なない。人々の信仰がある限り。
一時的に消えるだけで、死ぬことはない。
俺が、残心も兼ねて少女を見つめていると、消失が顔まで達し始めたところで、少女の口が動いた。『ありがとう』と。

そして、俺はやりきれない思いで、その場を立ち去り、その数週間後にその世界を救った英雄として祭られることになった。
けど。
俺は、決してこのことを忘れることはないと思う。
人の心は、時として神をも凌駕する。神とて絶対ではないのだ。寧ろ、人の信仰の仕方によってその性質が左右される場合が殆どなのだから、ある意味、神にとって一番の弱点は、人の思いなのだ、と言うことを。
……ずいぶんとまぁ、懐かしい夢を見たものだ。
アレからこちらの世界に戻ってきて、早一年、か。
色々あったものだ。主に、勉強面で。
二年間もこっちの世界を留守にしてたんだ。勉強がおろそかになってしまうのも当然だ。
特に、高校の受験シーズンを次の年に控えた、中三の頭に召喚されてしまったのだから、由々しき事態だった。
忘れかけていた授業内容を取り戻すのに、どれだけ時間が掛かっ

たことか……。
　ま、無事に志望校に入学できただけでもよしとしたけど。今思い返して見れば、俺にとってはかなりはた迷惑な出来事だったなぁ、と後になって何度も思い返す派目になるとは、召喚された当初は思わなかった。
　そこまで考えて、さて、と過去の思い出に浸るのをおしまいにした。
　そして、俺は入学式に送れないように、今日初めて行く広告の制服に、着替え始めた。

第一部分　少年にべた惚れの死に神って……

さて。今、俺は非常に怒っている。
理由は簡単だ。目の前にいる、絶世の美少女のせいだ。
何かどっかでみたことがあるこの少女。いや、見覚えがある程度ではない。はっきりと覚えてる。
この少女は、髪と目の色こそ違うが、間違いなく異世界で俺が倒したはずの少女だ。
ウウウウウウゥゥゥゥゥゥゥ……こいつのお陰で、俺は、俺はああああああぁぁぁぁぁぁぁ……――
「本当になんてことをしてくれますかお前は！」
「ご、ごめんなさいって、言ってるでしょ……」
「ごめんで済んだら警察はいるかあああああああああぁぁぁぁぁぁ」
「きゃぅ……」
全く、どうしてくれるかね。普通、番……つまり、め、め、めめ……夫婦になるっていうのは、双方の同意を得て初めてなるもんだろうが！
「それをすっとばしていきなり番の契約とやらを結ぶ馬鹿が何処にいるんだあああああああああああああ！」
「ひぅ……で、でも、悪いことばかりじゃないんだよ？　ほ、ほら、さっきも言った通り、契約結ぶだけで不老不死になれるし……」
「誰が不老不死になりたいつったんだよ！　つか、そりゃお前と同じく始祖系の死に神になっちまうからだろうが」
そう。俺が怒っているのはその点だ。別に死に神に求婚されたとして……まぁ、現実感は余り沸かないだろうから困るだろうが、怒るほどではないと思う。事実、精霊王と婚姻を結んでいる人間の王だっているっていう話聞いたし。
俺が怒っているのは、こいつが俺の同意なく勝手に番にしてくれちゃったことに対してで、その副作用的なものについてである。

――そう。既に発言したからわかるかと思うが、つまるところ、俺は高校に入学と言う記念すべきこの日に、死に神へ昇格と言う望んでもいないのに名誉なことになってしまったのである。

遡ること、十分前。

俺は入学式が終わって、ＬＨＲも終わって。いざ、帰ろうとしたところだった。

急に空から少女が降ってきて、

「お願い、私と番になって！」

と言われながらキスまでされてしまったのだ。

急に起こった怪奇現象に数十秒混乱した。

そして頭の中を整理して、少女に話しかけた。

「貴方は誰ですか？　というより、何処かでお会いしましたっけ？」

何処となく、見覚えのある顔に、俺は怪訝な顔をしていただろうが、とにかく何か返そうとしてそう問いかけたのだ。

そして少女から帰ってきた答えが、

「私、シャルレットだよ？　覚えてない？」

これだった。

「しゃるれっと？」

「……覚えてるわけ、ないか……あの時は瘴気のせいで髪の色とかかなり違ってたし。性格も汚染されててかなりやばかったみたいだし」

それを聞いて、更に数分、黙考する。そして、思い出したのは今朝見た夢だった。

少女が言うその名前について、聞き覚えのある名前は一人……もとい一柱しかいない。それって、俺が討伐した邪神の名前だったよな。

そう思い、俺は「もしかして」と言い出そうとした。そこで、表情を読んだのか、

「あ、思い出した？」

と、少女は満足したような顔でそう言ってきた。
「って、お前本当にシャルレットなのか？」
俺が再度そう問いかけると、シャルレットらしき少女は今度は心底嬉しそうな顔をして、こう言った。
「そうだよ？　君のお陰で正気に戻れたし、失ってた力もつい最近やっと力が回復して満足に動けるようになったの！」
うんうん、それはよかった。俺としても、神は死なないことは知ってたけど、流石に心に穴が開いたような感覚は何処かで感じてたし。それがやっと埋まったような感じだった。
そして、しばらく互いに感傷に浸っていると、不意にシャルレットの方から話し掛けてきた。
「あ、そうだった！　すっかり忘れてた！」
「うん？　何だ？」
その内容には、言われる前から、そこはかとなく嫌な予感を感じていた。実際にはその予感は当たっていたわけだが。
「事後承諾で悪いんだけど、私と番になって♪」
最後に音符マークがついたのはきっと気のせいではないだろう。多分、本当に語尾に音符がついているはずだ、文章に表したら。
彼女のその言葉を聞いた俺は、最初はどういうことか理解出来なかった。でも、考えていく内に、
――あれ？　番って、夫婦ってことだよな？　つまり、求婚ってこと、か？
そこまで考えて、いや、それはないだろ、と否定しかけて。
あることが気になった。そしてそれが気になり始めると同時に、とても嫌な予感がしだした。
「なぁ、事後承諾ってどゆこと？」
「うん、実はもうさっきのキスで番の契約を結んじゃった。余りにも感情が高ぶってて、つい自制が効かなかったんだ。てへっ」
俺、呆然。その間にも死に神様の話は続く。
「詳しく説明させてもらえば、私と番になるって言っても、神と普

通の生物って普通のやり方じゃ番に慣れないの。その、存在する次元の問題で。それを解消するために、番の契約で君を私の『眷属』にしちゃいました！」

話を聞いている内に、ようやっと状況を飲み込めた。

番になる。その契約を俺の了承なしにした。つまり既成事実ってやつだ。

さらにそのあとの言葉で気になったのは「眷属」という言葉。

「大変嫌な予感がしてならないんだけどさ、『眷属』って、ナニ？」

「眷属？　あ、あはは……怒らないでね？　眷属というのはこの国の言葉では血縁関係にあるもののこと。つまりは私に連なる神様になるってこと」

一瞬、沈黙。

ほんの一瞬でも、ぶちギレて良いかどうか、その葛藤をした俺を褒めてほしい。

「ふざけんなあああああああああああ！」

俺の絶叫が教室どころか、学校のかなり広い範囲に響き渡った。

――そして状況は現在に至るわけである。

話を戻そう。

俺はこのクソな死に神に事後承諾という形で無理矢理番にさせられた。

そしてその副作用的なもので死に神になったのだ。

因みに目の前にいるシャルレットから聞き出した話では、死に神といっても某作品のような死に神ではない。単純に、人の寿命を管理したり、死してなお現世に留まる霊魂をいい方向へ導いたり。とにかく、良くも悪くも人の命や、死後に纏わる仕事ばかりを行なう神だ。

霊を使役することも出来るらしいけどな。マルチタスク万歳。思い返しながら話を続けられたぜい。

「はあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～……」

長い溜息をついて、俺は目の前の事実から逃避しようとするが、逃避しても仕方がないと、目の前の死に神少女、シャルレットに向き直る。
「第一、俺はお前と付き合うつもりなんて、今のところはないぞ？」
「心配はしないでいいよ。意地でも振り向かせてみせるから♪」
俺があの聖剣で浄化してやったことで、元の純心で活発的な少女に戻ったらしい目の前の神様。
こいつの顔を見るに本心から俺に惚れ込んでいるのだろう。いや、神に好かれるのはいいとは思うけど、ここまで惚れ込まれるのも困るんだよな。それに、そうだからって本人の同意もなく急に番にするって言うのは無茶振りがあると思うんだが。
しかも事後承諾ってのが最悪だ。
「……はぁ……わかったから。もう、とりあえずは番の契約とやら解いてくれ」
「無駄だよ？」
「はぁ！？」
今、この目の前の少女は何と言ってくれましたか！？　解約できないと！？
「いや、解けないことはないんだけどね。どうやったところで、契約によって君の変わってしまったところは戻すことは出来ない」
は？　何ですと？
「つまりね？　君を神にすることは出来るけど、その状態から人間に戻すのは不可能なの。だから番の契約自体は解けないことはないけど、契約解いても人間には戻れない」
……ｍｊｄ？
「マジも大マジ。ふふ、よかったね。万人共通の願い、不老不死が叶っちゃって♪」
「うれしくねぇわこの大馬鹿ヤロォー！」
「ひゃぅあぁっ！」
シャルレットは、窓を割って、見事に空の彼方へと消えていった。

……いや、比喩だけどさ。実際には確かに吹っ飛ばしたけど仰向けで床に寝てるし。
てか本当にそれくらい飛ばせたら退くなぁ。あ、自分自身だから退けないか。

そして。シャルレットを吹っ飛ばした後。俺は既に纏めていた荷物を持って、ようやっと帰宅の路についた。
因みにシャルレットは俺に吹っ飛ばされたのがよっぽど堪えたのか、シクシクと泣いている。
「……マジ勘弁してくれよな……ったくよ。てか、さっきの誰にも聞かれてないよな……」
「……グス。それなら問題はないよ。音・人除けの神術つかったから。私達の会話が聞かれることはないから安心して……ヒック、うぅ……」
「そうかい。それは安心した……な！」
「あぅ……うぅ、酷いよ。ごめんっていったじゃ～ん……ヒック、グスン」
……シャルレット。あのな、そう軽そうに返すなよ。お前はさっき人一人の人生台なしにしたんだぞ。それに今のチョップは力を入れなかったからそれほど痛くないはずだぞ？
「そう簡単に許せるかっての」
「う～……しつこい男は嫌われるよ？」
「余計なお世話だ！」
ったく。誰のせいで怒ってるんだよ。少しは反省しろよ。
「ところで、お前がこっちに来たのはいいけどさ。どうすんのさ、これから先」
「うん？　ああ、それなら心配ないよ？　『篠紙玲香』って名前で入学したし」
「ぶふぁ！」
な、今何と言いましたかこいつ！　入学した！？

「あのさ、一つ聞いていい？」
「なーにー？」
陽気な声で聞き返してくるシャルレット。つか、いつの間に立ち直った！？
「シャルレット……お前、何処に住むんだ？」
「駅近くのマンション。お金も十分あるからだいじょーぶ！」
よ、よかった……。安心した……。無関係な人に暗示をかけて無理やり住まわせてもらう、何てことになってなくて本当によかった。
「そんなことするわけないでしょう！　貴方は私をなんだと思ってるの！？」
「ロリっ娘死に神。しかも我が儘」
人の同意なしに勝手に夫婦にする奴なんて十分我が儘だと思う。
「……そこはかとなく酷いなぁ、それ」
うっさいだまれ。事実だろ。

「じゃ、私こっちだから。また明日学校で会おうねー」
「はいはい、いいからさっさと行けっての」
「……、」
無言で、しかし物足りないと言う顔でこちらを見てくるシャルレット。
何処となく保護欲が沸いてくるは気のせいだろうか。
「わかったわかった。また明日学校で会おうな」
「うんっ」
俺が言い直した途端、表情を一変させて、それはもう嬉しそうに顔を綻ばせた。うん、尻尾がついてたらブンブン振ってるだろうな。
「じゃあな」
「さよならー」
そう言って、俺達は別れた。

◇

「ただいまー」
「お帰りー」
「お帰りなさーい」
何処にでもある、普通の家庭の挨拶。
俺を迎えてくれた声の主は、母……だけではなく、姉のものもある。
「あれ？　姉貴、部活は？」
「今日……というか、今月号は私はオフなのよ。で、学校の雰囲気には馴染めそう？」
「いや、まだ今日入学式が会ったばかりだぞ。ロングホームルームがあっても、まだわかんないって」
姉貴の問いに対し、即答とも言える早さで俺は答える。因みに姉の部活動と言うのは、新聞部のことだ。他にも何たら同好会って言うのに入ってるっぽいけど、あんまりそっちの話は聞いたことがない。
「それもそっか。ところで倫人は部活動するのー？」
「他にいい部活がなければ新聞部に入る予定」
うん。後を追うようでシスコンっぽいって周りから言われるかもしれないけど、「中学校も新聞部だったから興味がある」というきちんとした理由（といえるかどうかは不明だけど）がある。
「新聞部かぁ。いいと思うな。創作物同好会っていうのも同じ部屋で活動してるし、暇なときは兼部って形でそっちにも参加できるから結構お勧めかな」
創作物同好会、か。さっきも触れた、姉貴が入っているもう一つの部活動のほうだったか？
「どんな同好会なんだ？」
「いろんな創作物を作ったり、鑑賞したり、遊具だったらそれ使って遊んだりするの」
へぇ。なんだか、かなり自由度の高い同好会なんだな。

「面白そうな部活だな」
「でしょ！」
うん。入部候補の一つに入れておこう。

さて。ここで困った事実が一つある。今日は入学式だけで、若干イレギュラーがあったといえど、昼間の内に帰ってきてしまった。
新入生故に学校でやることのない俺は、居てもつまらないだけなので家に帰ってきてたのだが……実に困った。
家に居ても、ＴＶゲームをする以外にやることがない。
「どうすっかねぇ……」
「暇なの？」
「そ、暇なの……って、誰だ！」
誰も居ないはずの自室で呟いていた一人言に、何者かの返答があった。驚いて叫び声を上げてしまった俺は悪くないと思う。
勢いよく声のした方を向いて見れば、そこには膝上くらいまではあるだろう、艶のある黒い髪をストレートで後ろに流している絶世の美少女――シャルレットがいた。
「なんだ、お前か……」
「なんだって何よ～。普通、そこは『なんでお前がここに居るんだ』って慌てふためくところじゃないの？」
「神に常識を求めたところで無駄だろ？」
お前なら帰宅してすぐに瞬間移動して来ても全然おかしくねぇ。
そう付け加えて、俺は床に雑魚寝した。
むぅ、とふくれっつらをするシャルレット。いや、そうしても可愛いだけで何にもならんぞ。
「で、何しに来たのさ」
「ん？　暇だから遊びに」
「ふぅん……まぁ、別に暇で遊びに来ただけなら問題はねえけどさ」
「けど？」
一つだけ、言わせて欲しい。

「きちんと玄関から来客しろやあああぁぁぁぁ！」
「ひゃあああぁ！」
母さん、ここに不法侵入者が居ます。警察へ通報しましょう。
「と、冗談は終わりにして。とりあえず、済んだことをいつまでも気にしても仕方ないし、この件はこれで終わりにしよう。けど、今日び、瞬間移動なんて魔法使える人いないんだから、次からは非常時以外では使うなよ？」
「……わかった」
しゅん、とうなだれるシャルレットをなだめた後、俺達はこれから何をしようかと話し始めた。
「ミチヒト、これ何？」
「ん？　ああ、それはプレイキューブって言うんだ。ＴＶゲームっていう遊具で遊ぶのに必要な奴だ」
「へぇ……ＴＶゲームは知ってるけど……やっぱり世界が違うとゲーム機も違うんだねぇ」
その様子だと、他の世界にもＴＶゲームがあるみたいな感じだな。
「ＴＶゲームやったことあるの？」
「うん。何度か。平行世界……ここととよく似た別の世界にも似たようなのいっぱいあるしね。例えばレクレーション１６っていうのもこれと同じで専用ディスクを使って遊ぶタイプだったし。それを買って、神界で、ね」
へぇ。ここととよく似た別の世界、ねぇ。それならあってもおかしくはないか。
「何かやりたいやつでもあるか？」
さっきまでは一人だったし、持っている一人用ゲームは全てゲームクリアしてしまっていて飽きた奴ばかり。でも、二人いるとなると話は別だ。対戦ゲームとか、協力プレイが出来るゲームとかもそれなりには持ってるし。
「うーん……」
シャルレットは、俺が開けて示した押入れのラックの中を見て、

手をかざしながら考え出した。
「……ん？　これは……へぇ、これ面白そう！」
そう言って出してきたのは、これまた俺がお気に入りの、「カルディア魔法戦争」という戦略シミュレーションゲームだった。
因みに戦略系と言うとロボットなどが主戦力の、所謂ＳＦ系が結構シェアを占めているような感覚があるのだが、俺の気にいっているこれはファンタジーものだ。
「これまたピンポイントで面白い奴を選んだなぁ。てか、背表紙しか見てないのによくわかったな」
「ん？　ちゃんとパッケージは全部見たよ？　出してないだけで」
……あ、忘れてた。この少女神だったっけ。常識通じなくて当たり前だわー。さっき手かざしてたのは透視かなんかしてたってことか。……力の無駄遣い乙。
そして俺は、ディスクを取り出してゲーム機にセット……――
「あ。別のゲームが入れっぱなしだった」
「……何か、随分とずぼらだなぁ……。ちょっと意外」
「うるさいな。ほっとけ」
ずぼら発言を無視して、取り出し忘れていたディスクを取り出してケースに入れた後。その後、「カルディア魔法戦争」のディスクを手にとって、ゲーム機に入れる。
最後に、二人プレイ用に買ってあったもう一つのコントローラーを取り出して、接続。これで準備は整った。
「さて。準備完了だ」
「じゃ、ゲームスタート！」
そして、やたらとハイテンションになったシャルレットが、ゲームの電源スイッチを押した。
――五分後。
大抵の戦略ゲームでは、ステージ設定とかが終わってゲームが始まったばかりだろう。

とりあえず、近接系キャラを前に出して様子見と行こう。
「ん？　次は私のキャラの行動順だね！」
このゲームはキャラの俊敏値によって行動順が決まるため、一つの自軍フェイズ内で全てのキャラの全ての行動を実行する方式と違い、かなり混戦しやすい。
何故なら、この方式だとキャラによっては全てのキャラが一通り行動を終える中で、二回行動出来る場合が出てくるからだ。故に、どう動くのか、かなり予測がつきづらいのだ。
「んー、キャラクターのスキルのデータを見た限りだと……このキャラをここに持ってくるのが最善、かな」
そう言いながら彼女が動かしたのは……ゲッ、このゲームで一、二を争う魔法特化型のキャラじゃん！
しかも俊敏性もそこそこ高い奴。うわぁ、やばいかもこれ。
――十分後。思いのほか、シャルレットは強い。
どうやら、平行世界とやらで何度かやったことがある、と言うのは伊達ではないらしい。何度か、どころの実力ではないからだ。
あれだ、多分神だから、回数は少なくても一回辺りのプレイ時間がかなり大いに決まっている。
「くっ、そこでフレイムワールドが来るとは……」
「くっくっく、それだけじゃないよ。それに、次のターンは私のジョーカー！」
くそ。またしても奴か。このゲームで一、二を争う魔法特化キャラ。
「さぁ、出でよ破壊竜♪」
「ぎゃあああああああああああああああ！」
ああ！　俺の、俺のジョーカーがああああああああああああ！
そしてスキルのムービーが終わり、戦闘結果が映し出された。結果は……無念。ゲームファンから「総帥」と呼ばれて愛されるキャラは、消し炭となって消えた。……総帥よ、お前はよくやってくれた。ありがとう……！

――その後も、俺が選んだキャラはことごとくが撃退されていき、シャルレットとの初勝負は、俺の大負けで終わった。

「あはっ！　大勝利ぃ！」

くぅ。ボロ負けだぁ……。こ、ここまで負けるのは初めてだ。

「この、もう一回だ！」

あそこまでやられて、黙ってられるか！

そう意気込んだはいいものの、見事に全戦全敗するのだった。

あぁ、流石は死に神……戦闘においては叶う分けなかった。……

関係ないけどさ。

第一部分　少年にべた惚れの死に神って……（後書き）

一言：予約投稿しようと思ったのに設定し忘れた……。
備考：改稿マークは微細部の修正です。本文は投稿日同日１９時現在、殆ど改稿していません。

キャラクター紹介

【静馬　倫人編】

神としての名前
ミチヒト・シズマ・フレンティーニ・カルディーナ・ファルトルニス

神としての性質（善神、悪神、堕神、始祖神のいずれか）
始祖神（眷属）

司る事象
死・転生・豊穣
死と豊穣は言わずもがな。転生は死を向かえた魂の導き。

備考
　異世界で堕ちた神を討伐（性格には浄化）した元英雄。但し、その力は元の世界に戻る際に殆ど失っている。
　死に神たるシャルレットに惚れ込まれているが、本人はありがた迷惑以外の何物でも無い。
　シャルレットに（同意なく）番の契約を交わされた結果、シャルレットの眷属となってしまっている。その神としての性質上、霊体を視認でき、触れ合うことができ、会話も可能など、霊媒師としてはスペシャリストになる素質？　を持っている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5008ba/

死に神のコイビト！

2012年1月14日19時56分発行